



# まったく何もないという可能性とその語法

丸山, 栄治

---

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2020-09-25

(Date of Publication)

2021-09-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7830号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007830>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



## 論文内容の要旨

論文題目 まったく何もないという可能性とその語法

氏名：丸山 栄治

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 松田 毅 教授  
(副) 加藤 憲治 准教授  
(副) 長坂 一郎 教授

(注) 4, 000字程度(日本語による)。必ずページを付けること。

「何もない」という言葉を正確に理解しようとする場合、その言葉が発せられた状況や、発話者がもともとどのようなものがあると期待していたのか、そういったことを明確にする必要がある。例えば、冷蔵庫を開けたときに「何もない」と言った場合、たとえそのときに発話者が特定の何かを思い浮かべていたのではないとしても、「何がないのか」と聞かれば、飲み物や食べ物といったその状況に適したのものや、発話者が期待していたものを答えることができる。このことは、「何もない」や「無」という表現を用いる哲学的な議論にもあてはまるだろう。例えば、「無」が問題だと考える人に「何がないことを問題にしているのか」を聞けば、「人生の意味が」と答えるかもしれない。あるいは、「存在する」とも言えない何かを無という言葉で表現しているのだ」と答えるかもしれない。後者の場合には、「何であれば『存在する』と表現してよいのか」という問いを通じてそこで用いられている「無」の意味をある程度特定できるかもしれない。哲学において「無」が語られる多くの場合でも、「何が存在しないのか」、あるいは、「存在する」という言葉で何を意味しているのかを明らかにすることで、問題のポイントを明確にすることができると思われる。

本論が検討するのは、「何が存在しないのか」、あるいは、『存在する』という言葉で何を意味しているのか」という問いによっては明らかにできない、次のような「無」の語法である。「何もない」という言葉でまったく何もないということを表そうとする場合、例えば、「世界に存在するものすべてが存在しない」のように、何らかの主語を明示し、その存在を否定するという仕方ではしばしば言い換えられる。しかし、本論が検討する語法では、「何もない」は何らかの存在の否定や欠如を意味しない。この語法での「何もない」は何らかの主語が省略された表現ではなく、すでに完結した文であり、複数の構成要素からなるような複合的な表現に言い換えることができない。そして、それにもかかわらず、この語法のもとでの「何もない」という文について我々はその真偽を問うことができる。その際に問われているのは、何らかの存在が存在しないかどうかではなく、単に何もないかどうかである。そのため、「何が存在しないのか」、あるいは、『存在する』という言葉で何を意味しているのか」という問いによっては問題のポイントを明らかにすることができない。「何もないのか、あるいは、そうではないのか」という問いは、最初から存在を問題にしていないからである。そのため、「何が存在するのか」という問いに対する答えがまったく不明なままであっても、「何もないのか、あるいは、そうではないのか」という問いには、「何もない」は偽であると答えることができる。

この「何もない」という文の語法は、松井吉康氏が2007年に *Philosophisches Jahrbuch* に掲載した論文「存在の呪縛 (Der Bann des Seins)」で明らかにしたものである。この論文以降、松井氏はこの語法を次のような文脈で問題にしている。この、何らかの存在の否定ではない「何もない」の真偽を問う問い、すなわち、「何もないのか、あるいは、そうではないのか」は、論理的に考えうる第一の問いである。

ここでの「論理的に考えうる第一の」という言葉は、次のことを意味すると考えられる。まず、何もないということは矛盾を含んでいないという意味で論理的に可能であり、「何もない」は真と偽の両方の可能性がある。そして、どのような存在についての主張も、それらが真であろうと偽であろうと、何もないのではないことを前提にしている。例えば、目の前に机が存在するということは、仮にそれが錯覚であったとしても、何もないのではないことを前提にしている。すなわち、「目の前の机は本当に存在するのか」という問いは、その答えがどのようなものであったとしても、「何もないのか」という問いに偽と答えられる場合のみ問題にすることができる。また、「何もない」が偽となることを定めるような神のような存在を考えることはできない。というも、そのような存在が存在しているならば、何もないのではないことを前提にしているからである。こうした意味で、「何もない」が真か偽かは第一の問いである。また、さらに、既に述べたように、ここで真偽が問われている「何もない」は「何かが存在しない」ということを意味していない。そのため、「何もないのか」という問いに答えるために、存在論的な様々な問い、例えば、「過去は存在するのか」、「数は存在するのか」、「神は存在するのか」といった問いに対して予め何らかの答えにコミットする必要はない。目の前の机の存在であれ、神の存在であれ、我々が暗黙に存在すると考えているもの、あるいは、本当に存在するかどうか答えが出ていないものついて、「何もないのか」という問いは一切問題にしていない。そのため、この問いに対しては、存在論的な様々な問いに対する答えがまったく不明なままで、「何もないのではない」と答えることができる。存在についてのいかなる主張も何もないのではないということを前提にはするものの、「何もないか、あるいは、そうでないか」という問い自体は何らかの存在に関する問いではないのである。したがって、「なにもないのか」という問いに答えるために、「本当は何が存在するのか」という問いに答える必要はない。本論は、このような第一の問いという文脈で語られる無の語法を問題にする。

松井氏の議論は、『何もない』という文は存在の否定を意味しないが、その真偽を問うことができる」という語法のもとの何もないが中心となっている。本論の目的は、この語法が、分析哲学の文脈で議論されてきた2つの語法、すなわち、量化表現としての無と単称名辞としての無のそれぞれと異なるということ、これらを相互に独立した語法として認めなくてはならないということを示し、それを通じてこの語法の特異性を理解することである。「何もない」が、存在の否定を意味せず、真偽を問うという無の語法を『「無」の文としての語法』と呼ぶならば、本論の課題は以下の3つの違いを、すでに論じられている無に関わる問題の中で明確にすることである。

(a) 量化表現としての「無」

(b) 単称名辞としての「無」

(c) 文としての「無（何もない）」

(a)の量化表現の「無 (nothing)」は、「・・・であるようなものは(ひとつも)存在しない」を意味し、他の量化表現「...であるようなものが少なくともひとつある (There is at least...)」「あるものが...である (Something is...)」などの否定によって言い換えることができる。例えば、「私の銀行口座には(残高が)何もない (There is nothing in my bank)」は、「私の銀行口座には少なくとも1円のお金がある、ということはない」と言い換えることができる。分析哲学においては、自然言語の「nothing」は一般的には量化表現であって、極端な場合は、カルナップのハイデガー批判にみられるように、それ以外の語法は実際には無意味だとする考えもある。しかし、近年では、(b)の単称名辞としての「無 (nothing)」の語法も意味のある表現として議論されている。例えば、「Nothing comes from nothing」という文を考えよう。この文に現れる二つの「nothing」をどちらも量化表現として読むならば、「 $\sim \exists x \sim \exists y (x \text{ comes from } y)$ 」となる。これは言い換えれば、「 $\forall x \exists y (x \text{ comes from } y)$ 」、すなわち、「すべてのものは、あるものから生じる (Everything comes from something.)」となる。しかし、この文は「無からは何も生じない」という意味でとることもできる。この場合、「Nothing comes from nothing」という文の最初に現れる「Nothing」は量化表現としての無であり、最後の「nothing」は単称名辞だと考えねばならない。これら(a)と(b)の無の語法に対して、(c)の文としての語法は、既に述べたように、何らかの存在を否定する表現ではなく、そして、量化表現としての無や単称名辞としての無が文を構成する部分であるのに対し、この語法のもとの「何もない」はそれ自体で文として成立し、真偽を問うことができる。

以上の語法の違いについて、本論では次のような順序で論じる。まず、「第1章 無と量化」では、量化表現としての「無」と文としての「無 (何もない)」を対比し、前者の表現を含む文が数えられるものを問題にするのに対し、後者が問題にする無はそうではないことを示す。「第2章 無の様相」では、分析形而上学において可能世界意味論をもとに論じられている無の可能性についての議論をとりあげ、文としての「何もない」の真偽を考えると、関連する様相表現は不可欠なものではなく、可能世界意味論をもとに論じることが適切ではないと主張する。「3.無についての思考の志向性」では、単称名辞としての無と文としての無の違いを、無についての思考がどのような志向性をもつのかという論点とともに明らかにする。最後に、「4.補論：前期ウィトゲンシュタインにおける『世界が存在しない』ということ」では、以上の章で示された「無」の文としての語法の特異性を別の角度から明確にしたい。まったく何もないということが第一の問いとして問われる文脈では、我々が存在する世界について何も問題になっていない。このことは、世界がいかにあるかということと世界があるということとを区別し、ある意味で後者を重視した前期ウィトゲンシュタインの哲学と一致すると考えられるかもしれない。し

かし、この補論では、これらが根本的に異なる主題を扱っていることを示し、それを通して「無」の文としての語法の特異性を明らかにする。

論文審査の結果の要旨

氏名	丸山 栄治
論文題目	まったく何もないという可能性とその語法
要 旨	
<p>提出論文は、丸山の言葉を借りれば、「何もないのか、あるいは、そうではないのか」という「論理的に考えうる第一の問い」に関する問題提起であり、その主張を正当化するための分析的形而上学的考察の試みである。この問いとその位置づけはトリッキーで読者を当惑させるものであるが、それを動機付けているものが二つある。ひとつは、松井吉康の論文と同名の著書『存在の呪縛 Der Bann des Seins』であり、もうひとつは、近年の分析哲学における「無」に関する考察の興隆である。松井の主張は、一般にライプニッツ形而上学の根拠律との関連で問題となる「なぜ何もないのではなく何かがあるのか」ではなく、何らかの存在の否定ではない「何もない」の真偽を問う、上記の問いがパルメニデス以来、ハイデガーに至るまで、存在に呪縛された哲学者らが問うことになかった第一の問いである、というものである。この極めて強い主張の妥当性は、松井に対する議論状況の有無も鑑み、慎重な検討を要するが、丸山は松井が行っていない、分析哲学の「無」に関する諸考察を整理し、松井の主張を或る時は自説の支えに論じ、或る時はそれを擁護しようとする。丸山が距離を取り吟味をしていない、松井の主張の是非をかりに脇に置かなければ、「無」の分析哲学に関する丸山の試論は、「無」や「否定」に関する西洋哲学史の豊かな蓄積を考慮していない点に不満が残るものの、松井も念頭においている、ドイツ神秘主義や西田哲学の文脈に研究が終始しがちであった、「無」に関する論理学的言語分析的探究に学び、それを批判することで、無の哲学の思惟を喚起する点は評価できる。</p> <p>序論は文「何もない」を特徴づける。それは量化表現や単称名辞のように文の構成部分ではなく、それ自体で成立し、真偽が問え、かつ無矛盾であること。その真偽は「本当は何が存在するのか」という問いから独立なこと。現実世界では偽であるが、「第一の問い」の意味で論理的に先行すること。以上の特徴づけが、分析不可能な「原子文」を想起させる点の問題点の検討はしていないが、問題の所在を指摘した点は評価できる。</p> <p>第1章 無と量化</p> <p>丸山は第一の問いとしての「何もないのか」では、「何もないのではない」が「少なくともひとつ」のように数えられるものを問題にしていないことを論拠に、文「何もない」と「ない」の量化表現を区別すべきであると主張する。また、数えられないものがありうる場合、「何かがある」と「少なくともひとつ何かがある」が論理的に同値でないこと、量化表現を含む文は「いくつあるか」が、問えるものに関する文であることを確認する。そしてこの主張への二つの反論を想定し退ける。第一に、クレインの形式化の改訂的アプローチの観点とオルソンの疑似数の議論の援用により、「無」の語法の上記の区別が厳密すぎるという批判が、記述的アプローチにとどまり、存在者に関して同一性概念が適用可能なものだけを問題にしている難点を指摘する。第二に、第一の問いである限りの「何もないのか」を問う文脈では、述語論理学の存在汎化の推論規則が「必ずしも妥当であるとは言えない」点を指摘する。存在汎化の推論規則は、たとえば「目の前の机が存在する」から「何もないのではない」を妥当な仕方でも帰結させることを許すと思われるが、丸山は、第一の問いの文脈では「何もないのではない」ことを前提にして、はじめて「存在」について明らかでできると述べる。伝統的な存在論も、無とゼロの非同値性でなく、存在と数の非同値性を議論してきたが、丸山はこの問題を量化の観点の限界として論じていることには成功していると評価できる。</p>	
主査記載 氏名・印	松田 毅

## 第2章 無の様相

丸山は、第一の問いが含む「何もない」に様相表現が不可欠でないと主張する。「なぜあるものがあるが何もないのではないのか」が、何もないことが可能であることを前提することを確認した後、引き算論法により「具体的対象が存在しない可能世界が現実世界から到達可能である」とする、コギンズの形而上学的ニヒリズムに対する、ヘイルの批判を参照し、可能性としての「まったくの無」は「それに何かを加えたら無ではなくなるようなもの」ではないと論じる。また、その様相表現を検討し、「まったく何もないについて、それが必然的に真であることと可能的に真であること、そして、現実にも真であることが常に一致する」ことを論理的に導く。前者については、ヘイルが第一の問いを解答可能と考えるところと異なる点、後者については、必然性、現実性、可能性を無差別にする点についての検討がない点が問題として指摘されるが、興味深い論証と論点を提出している点が評価でき、今後の洗練と研鑽を期待したい。

## 第3章 無についての思考の志向性

丸山は「何もない」が表現する「無」への志向性について「無」を単称名辞として捉えることで生じる難点、無が「何か something」に変わる困難が、思考対象を文として表現すれば解消されると主張する。無を志向的对象とするマイノング主義者、プリーストが無を矛盾する性質をもつ非存在対象、メレオロジーの観点から形式化した「空集合の融合」という「何か」とするのに対して、「何もないことが存在する（存在しない）」と語るができないから、何もないは存在対象でも非存在対象でもない志向的对象であると論じる。また、第一の問いに関わる「何もない」の語法は、無を何かにするものではなく、第一の問いを可能にするような思考の特殊な志向性であると言う。クレインの心的状態としての志向性論も参照するが、プリーストの「欠如は何かでない」の論点や事態への志向性概念の検討がさらに必要である。しかし、無の特殊な語法の特徴を多少とも明らかにした点は評価するべきであろう。

## 第4章 補論：前期ウィトゲンシュタインにおける「世界が存在しない」ということ

丸山によれば、第一の問いの「無」の語法の主題と『論考』の主張「世界が存在しない」は全く異なる。『論考』は、論理空間にどんな事態も成立しない無と世界が存在しない無とを論じる。前者の無は、事態の不成立が対象の非存在を意味するが、世界を構成する実体である対象は或る意味で存在しなければならず、ヴァン・インワーゲンの言う、矛盾を含んだ「偽装的な無」にあたる。後者の無は、対象が存在しないだけで矛盾はなく、「偽装的無」ではないが、『論考』の場合、世界の存在と対象の存在は不可分であり、対象の存在は命題の意義確定の根拠であるので、世界の非存在は、第一の問いの語法としての「何もない」の無とは異なると結論される。 $\sim\exists x(x=x)$ で問題となる「同一性」、「全体としての世界」の解釈にはなお検討の余地があるが、無に関するウィトゲンシュタイン解釈としてユニークで興味深い考察を展開したものとして評価できる。

本審査委員会は、以上のことから全員一致で、論文提出者、丸山栄治が博士（学術）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

## 審査委員

区分	職名	氏名	区分	職名	氏名
主査	教授	松田 毅	副査	教授	茶谷 直人
副査	准教授	加藤 憲治	副査	講師	新川 拓哉
副査	大阪経済大学・講師	稲岡 大志			